

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320062

研究課題名(和文) 多重言語使用からみたアジア地域の言語生態

研究課題名(英文) Dynamics of Asian languages in Multi-lingual Areas

研究代表者

藤代 節 (FUJISHIRO SETSU)

神戸市看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：30249940

研究成果の概要(和文)：アジアのほぼ全域をカバーする各地で言語多重地域の言語生態についての研究を集中的に行った。本研究課題では：(1)言語接触記述研究を通時的側面での研究も含め整理し、(2)多重言語使用下にある言語共同体の変容と言語の変容を分析し、(3)多重言語使用下における言語生態の一般化及び(4)現代日本語の生態についても将来像の予測を試みた。これらの研究結果を公開シンポジウム(2011年2月ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会)にて発表した。研究結果は、CSEL シリーズ第17巻(ISBN978-4-903875-20-0)『ユーラシア諸言語の動態(Ⅱ)－多重言語使用域の言語－』としてとりまとめ刊行する。

研究成果の概要(英文)：We studied the language ecology of Asian languages in multi-lingual areas. The members are experts of Asian languages, whose distributions cover almost all areas in Asia. In this project we precisely check the linguistic data of the languages under multi-lingual situations and studied dynamic linguistic phenomena in Asia not only of modern languages but also of ancient languages. The members contribute their papers to the 17th volume of *the Contributions to the Studies of Eurasian Languages series :Dynamics in Eurasian languages II - Studies on Languages in Multi-lingual Areas-* (in print).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2009年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2010年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
年度			
年度			
総計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語接触、アジア諸語、少数民族言語、ユーラシア、旧ソ連、日本語、言語生態

1. 研究開始当初の背景

この研究は、現在までに明らかになっているアジア地域の言語接触の軌跡を把握した上で、研究協力者を含む参加メンバー各自が

従来から携わっている研究の対象言語を中心に多重言語使用という観点から進める研究である。文字をもつ言語が比較的古くから言語文化圏を形成してきたアジア地域には

過去の当該地域の言語事情を反映する文献が利用可能である。従って、アジアの諸言語は過去の言語使用についての情報を比較的得やすく言語生態観察に適している。

言語間の接触については、様々なパターンがある。例えば、政治的理由により、ある言語集団が異言語使用域に移動定住していく場合や、複数の言語集団が同一の生業形態をもち、新しい言語集団を形成することにより、リングフランカを新言語として持つようになる場合もある。例えば、極北シベリアに様々な契機で移住してきたロシア語話者集団や北方少数民族集団がやがてサハ語を共通語とし、新言語ドルガン語を形成した例はこれにあたる。

さらにビルマのカチン州やシャン州、中国雲南省に分布する小言語の中にはジンポー語などをはじめ、ビルマ系言語との接触を契機に成立したクレオール言語である可能性が疑われる言語もみとめられる。中には混成言語と考えるべき例(ナガミーズ等)も散見されるという。

比較的大きな言語の被る言語接触について、アラビア語を例にとれば、アラビア語は古来文語を発展させ、周辺の地域に大きな影響を与え、かつ自らも周辺の言語に影響されてきた言語である。今日、アラビア語は広域にわたり公用語としての地位を保ちながらも言語共同体の構成が流動性に富む地域においては急速な変容にさらされていることが予想され、多重言語使用と言語生態について定点観測の必要を示唆している。

日本国内に目を転じれば、言語接触の例として朝鮮語の言語生態については特に興味深い。日本語と朝鮮語の接触の歴史は長いが、日本国内に朝鮮語言語集団の使用言語記録が残っている例として、文禄慶長の役(16世紀末)捕虜集団の末裔が日本国内にて朝鮮語

を保ち、やがて通事用として残した朝鮮語関連図書(19世紀)にみる朝鮮語と日本語の接触の痕跡は、20世紀の在日朝鮮人の現在の朝鮮語に日本語がもたらした接触の痕跡に通じるものがあるという指摘がされている。その他、コーカサス地方から世界各地に分散した東西アルメニア語共同体が移住先の言語環境で経験した言語変容や漢語圏における古代語による諸文献(例えば、ウイグル文仏教文献)に現れる共通した漢語受容性質など、言語生態の特定の断面を切り取って示す例には限りがない。本研究課題ではこれらを整理し、言語生態について一般化可能な指標を抽出して行きたい。

2. 研究の目的

本研究課題は、2002年から実施された2つの科研費による研究課題「ユーラシア言語地域の総合的研究—言語接触の類型—」、「ユーラシアの言語接触と新言語の形成—新言語形成のメカニズム解明にむけて—」(共に基盤研究B、代表者は藤代)を発展させる形で、多重言語使用状態にあるアジア各地の諸言語の言語接触を研究対象とするものである。先行研究で行ったアジア諸言語についての個別的な言語変容の研究をふまえた上でそれら接触によって引き起こされる言語共同体の変容や再編を過去現在を通じて観察することを第一の目的とし、アジア各地で相似した接触状態で分布している「大言語」と「中小言語」の多重言語使用下の言語生態の分析を行う。

さらに第二の目的として、言語共同体のおかれた状況の変容により当該言語が変容・衰退・消滅し、場合によっては新言語形成(あるいは獲得)に至る一連の言語生態について個々の例からその指標の抽出を目指したい。なお、本研究プロジェクト遂行中に得られるアジア各地の多重言語地域からの情報をも

とにして、英語との間接的ではあるが大量接触の経験下にある現代日本語の将来像について、また日本国内の移住者等の相対的少数言語コミュニティの動向について言語生態の点から見通すことを第三の目的として掲げておきたい。

本研究課題で明らかにしたい点をまとめると：(1)言語接触記述研究を通時的側面での研究も含め整理し、(2)多重言語使用下にある言語共同体の変容と言語の変容を分析し、(3)前者 2 項を付き合わせて、アジア全域の諸言語について、多重言語使用下における言語生態の一般化を行う。さらに、これらを活かし、(4)現代日本語の生態について帰納的に将来像の予測を試みる。特に(3)にあげた点は本研究で目指すように多角的に扱われることはこれまでなかったのではないかと考える。

3. 研究の方法

本研究課題に参加する研究者は研究代表者・分担者 8 名、研究協力者 3 名である。全員がアジア地域に言語研究分野をもち、これまで研究活動を続け成果をあげている。本研究課題の目的とするアジア地域全域を視野に入れた言語生態研究のため、暫定的にアジアを 5 つに分けてメンバーを配置した。

A 東・極東アジア地域：日本、朝鮮半島、中国東部（日本語、漢語圏）

B 中央アジア地域：中国西部、旧ソ連邦域を含む中央アジア諸国、モンゴル国（ロシア語、漢語圏）

C 北アジア地域：ロシア連邦シベリア地域、トランスアルタイ地方（ロシア語圏）

D 南アジア地域：東南アジア域、インド（ビルマ語、英語圏）

E 西アジア地域：トランスコーカサス地方、アラビア半島、中近東域（ロシア語、英語、アラビア語圏）

以下の（ ）内は主たる研究言語

A: 東・極東アジア地域：早津(日本語)、岸田文隆(朝鮮語、ツングース系言語)、沈力(漢語)

B: 中央アジア地域：庄垣内(ウイグル語、チュルク語全般)、角道(蒙古系諸言語)、大崎紀子(キルギス語)

C: 北アジア地域：藤代(サハ語、シベリアの諸言語、ロシア語)、橋本勝(モンゴル文語、現代モンゴル語)

D: 南アジア地域：澤田(チベット・ビルマ系諸言語)

E: 西アジア地域：岸田泰浩(コーカサス諸言語)、近藤智子(アラビア語)

研究代表者の藤代は全体の研究を統括するとともに、北アジア域を担当し、主として 17 世紀の帝政ロシアによるシベリア進出以降ロシア語がこれら地域の諸言語にもたらした影響を全体としてまとめる。ソ連邦崩壊後の諸言語の言語共同体の変容・再編、個々の少数言語の 20 世紀を中心に多く起こった言語衰退及び消滅を経験した言語共同体のモデルをシベリアの少数民族言語にもとめる。一方で、本研究課題で対象とするアジア全域に広く分布しているチュルク語各方言(共和国トルコ語、中央アジア新興国家、新疆ウイグル自治区、南シベリア、サハ共和国などに分布するチュルク系諸言語)が移動過程で経験した新言語形成についてもパターンの抽出を試みた。この点については中国領内のチュルク系諸言語については庄垣内、沈(漢語関連全般担当)、角道(青海省の蒙古系諸言語担当)、澤田(チベット・ビルマ系諸言語担当)も参加して研究討議を重ねる。なお、藤代は庄垣内、大崎とともにチュルク系言語全般をカバーするが、東シベリアの文字記録を持たぬサハ語についてその英雄叙事詩テクストに注目し、サハ語の言語共同体が経験

した多重言語使用下の言語接触の軌跡をこれらテキストから通時的視点をもって分析した。

2年度目となる2009年度には初年度の研究活動をうけて、①大言語圏で相対的小言語のおかれた状況の共通性を検討し、②通時的にみた言語共同体の変容についてアジア各地からの具体的報告をふまえて、③アジアにおける言語生態の指標となる事項の抽出は可能か、について議論したい。さらに、各メンバー自身が成員でもある現代日本語言語共同体の被りつつある変容について言語接触の観点から検討した。

最終年度には各自補足的調査研究の後、成果をとりまとめる。

アジア地域の言語状況は、20世紀から今世紀にかけて急速に変容を来している。言語接触研究は未だ理論な面で不十分で先行研究も豊富とはいえない。本研究課題では多重言語使用下の言語生態の研究をアジア全体を視野にいたした言語接触研究として提出することができた。

4. 研究成果

本研究課題では、先行する科研費研究2題において、「言語接触」→「その後の新言語形成」と進めてきたアジア地域の言語研究を「言語生態の研究」として包括的に扱う。

アジア地域には話者人口や分布範囲の点から考えて「大言語」とみなしうる言語がそれぞれの言語圏を形成して存在している。一方で、話者人口の減少が著しく、消滅の危機に瀕している「小言語」も各地にある。本研究ではアジアのほぼ全域を視野に入れて、各地で起こった多重言語使用の軌跡を追い、現代アジア社会における多重言語使用の諸相についてその背景にある社会的文化的地域特性を考慮し、特に言語生態の面を中心に分析する。さらにアジアの大言語圏として、漢

語圏、アラビア語圏、ロシア語圏、などに暫定的に分け、これら大言語圏にある諸言語のいくつかを取り上げ、その言語生態について分析し、整理した。本研究では、個別に扱われることの多かったアジア域の言語接触について共通の言語接触事情をふまえ、通時的視点をもつことにより、アジア諸言語の生態について明確な記述分析を試みた。これら成果を生かせば、極東アジアの日本語が近い将来に直面するであろう「大言語」英語との併用、あるいは他のアジア諸語との併用による言語変容をどのように経験していくかについても帰納的に予測していくことが可能となるだろう。

言語接触の調査研究は特に1990年代から国内外で盛んになってきているが、本研究課題が目指す、アジア地域についての通時的視点を入れた、かつ言語共同体の変容も考慮した多角的なアプローチでの研究は新規であり、言語生態分析について具体的提案を初めて提出できたと考えている。

研究成果の一つとして、年度末に研究成果論文集を *Contribution of Studies of Eurasian Languages (CSEL)* シリーズの第17巻として出版する。成果論文集には、アジア諸言語の生態の共通性をさぐり、現代日本語の将来を見通す可能性にも言及する論考が納められている。ただし、この冊子は、本研究課題において行われた研究の極一部に過ぎず、以下の5.において掲げている多くの研究成果があげられている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計22件)

①藤代節、リュチコフのドルガン語資料について、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

②藤代節「食べるもの・飲むもの（ヤクート

語)、『Vesta—特集「世界の食を言語する」』、2010 冬号、6-7

③藤代節「北東アジアのチュルク諸語研究—日本からそそぐ北東アジアへの眼差し—」『北東アジア研究』別冊(1)、2008、67-84、島根県立大学北東アジア地域研究センター

④庄垣内正弘、ウイグル漢字音体系にしたがう傍注漢字音、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

⑤庄垣内正弘(Shōgaito Masahiro)、A Chinese Agama text written in Uighur Script、*Trans-Turkic Studies. Festschrift in Honour of Marcel Erdal*、査読有、2010、67-77

⑥庄垣内正弘(Shōgaito Masahiro)、Уйгурский фрагмент под шифром SI Kr. IV 260 из собрания РАН(ロシア科学アカデミー東方学研究所蔵ウイグル語断片 SI Kr. IV 260 について)、Письменные памятники востока、8、2008、177-186、St.Petersburg、査読有

⑦角道正佳、ホーチンバルグブリヤート方言の音節初頭*s の変化、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

⑧角道正佳、ラマ用にチベット文字で書かれたモンゴル語雑誌、音声言語、VI、2008、209-223、査読有

⑨早津恵美子、心理変化の惹起を表現する日本語の使役文—「人ノ側面ヲ Vi-(サ)セル」型の使役文について—、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

⑩早津恵美子、連用修飾語の解体—再構築にむけて—、国文学解釈と鑑賞、査読有、74巻7号、2010、60-68

⑪早津恵美子「語彙と文法の関わり—カテゴリカルな意味—」『政大日本研究』6号、2009、1-70、台湾政治大学[査読有]

⑫岸田文隆、「朝鮮語訳」にあらわれた別差上京をめぐる対話の日付について—対馬宗家文書 山川治五右衛門「朝鮮御代官記録」に基づいて—、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

⑬岸田文隆、「朝・日 語学書「隣語大方」の淵源」李東哲編『(中朝韓日文化比較研究叢書)日本語文化研究』、65-72。延吉：延辺大学出版社、2010年[査読有]

⑭沈力・馮良珍・中野尚美、山西回廊における入声の変遷—空間情報科学の方法を利用して—、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

⑮沈力・馮良珍・津村臣宏「用 GIS 分析山西霍州方言元音譜和律的衰退現象—以指小詞

變韻為中心—」『中国語言學報』No. 14、2010、137-157[査読有]

⑯沈力「漢語蒙受句的語義結構」中国社会科学院語言學研究所(編)『中国語文』1号、2010、45-53 [査読有]

⑰沈力、漢語蒙受句的語義結構(The Semantics Structure of the Affected Constructions in Chinese)、査読有、中国語文、1期、2009、45-53

⑱岸田泰浩、コーカサスにおける evidentiality の地域的類型について、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

⑲澤田英夫「ロンウォー語の格標示形式(澤田英夫編『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』)」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2010、175-212

⑳澤田英夫、カチン州のタイ系起源地名覚え書き、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

㉑橋本勝、モンゴルの高峰 Otgontenger の名称について、*Contribution to the Studies of Eurasian Languages*、査読有、17巻、2011、印刷中

㉒橋本勝、Academic tradition of Mongolian Studies in Japan、*Academic Tradition of Mongolian Studies in the World, Dankook University*、No. 1、2008、13-136

[学会発表] (計9件)

①藤代節、ロシア語ピジンとヤクート語ピジンについての予備的考察、ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「アジア言語の研究—最新の報告—」、2011年2月19日、京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター

②庄垣内正弘(SHŌGAI TO MASAHIRO)、How deeply Inherited Uighur pronunciation of Chinese (IUPC) rooted in Uighur?、First International Conference on Ancient Manuscripts and Literatures of the Minorities in China、2010.10.22、中央民族大学大学、北京

③沈力(SHEN LI)、“時”语法化的潮汐模式—以《老乞大》资料为中心—(“時”の文化化における潮汐モデル—『老乞大』データを中心に—)、中国社会科学院語言學研究所・浙江大学文学院主催「『老乞大』、『朴通事』の言語」国際學術シンポジウム、2010年6月12-13日、于富春江国际会务酒店

④岸田文隆、「朝鮮語訳」の朝鮮語かな表記について (その2: 母音について)、第2回訳学書学会、2010.8.12、高麗大学(大韓民国)

⑤澤田英夫(SAWADA HIDEO)、Case-marking of P and A in Lhaovo、Optional Case-marking Workshop、

16th Himalayan Languages Symposium、2010.9.3、SOAS(London)

⑥澤田英夫(Sawada Hideo)、Grammatically Conditioned Vowel Alternation of Lacid (Lashi) in Kachin State、The 41th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics、2008.9.20 SOAS、London

⑦橋本勝、Mongoliin Nuuc Tovchoonii etügen、ötögen gedeg ügiin tuhai、中国第2回蒙古学国際学術討論会、2008.9.23、内蒙古社会科学院(中国、フホホト)

⑧沈力(SHEN LI)、On the light Verb DE in Chinese、The 16th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics、2008.5.29.-6.1.、北京大学

⑨大崎紀子(Osaki, Noriko) Passive verbs with direct objects found in the text of the Manas Epos in Kyrgyz、The 15th International Conference on Turkish Linguistics、2010.8.20. Szeged U. Szeged、Hungary.

[図書] (計12件)

①藤代節(編)、『ユーラシア諸言語の動態(Ⅱ)―多重言語使用域の言語―』(Contribution to the Studies of Eurasian Languages、17巻、2011、(印刷中))

②庄垣内正弘(Shōgaito Masahiro)、The Fanwangjing 梵網經(Brahmajala-stra): A Chinese text transcribed in the Uighur script『突厥語文学研究―耿世民教授八十華誕記念文集―』、2009、426-434、中央民族大学出版社、北京

③角道正佳、「・・・屋」のアクセント、(岸本秀樹編)『ことばの対照』、2010、27-37

④角道正佳『土族語互助方言の研究』松香堂、428p.、京都、2008年

⑤早津恵美子、「V」との対応をなさない「V-(サ)セル」―語彙的意味の一単位性―、『日本語形態の諸問題―鈴木泰先生東京大学ご退官記念論集―』ひつじ書房、2010、51-67

⑥沈力、時”考―兼談実詞虚化的走向与語言形態特征的关系―、嚴翼相・遠藤光暁(編)『韓漢語言探索』、2010、295-325

⑦沈力・趙華敏、『漢日理論語言学研究』、学苑出版社、2009、404p.

⑧澤田英夫(SAWADA HIDEO)、'Upward-curling' Realization of Tone L in Lhaovo (Maru) Language、(戴昭銘 主編)『漢藏語研究四十年-第40届国际漢藏語言暨語言学會議論文集』、2010、168-175

⑨橋本勝、ニューエクスプレスモンゴル語、白水社、2010、137p.

⑩岸田文隆、語学書と歴史記録 ――早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」と対馬宗家文書との照合、『朝鮮半島のことばと社会―油谷幸利先生還暦記念論文集』、明石書店、2009、236-268

⑪岸田泰浩、アルメニア語、(石井米雄編)『世界のことば・辞書の世界 ヨーロッパ編』、2009、8、12、72-89

⑫大崎紀子、キルギス語、(梶茂樹、他編)『事典 世界のことば 141』、大修館書店、2009、244-247

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤代 節 (FUJISHIRO SETSU)

神戸市看護大学・看護学部・准教授

研究者番号: 30249940

(2) 研究分担者

庄垣内 正弘 (SHŌGAI TO MASAHIRO)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号: 60025088

早津 恵美子 (HAYATSU EMIKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号: 60228608

沈 力 (SHEN LI)

同社大学・情報学部・教授

研究者番号: 90288605

岸田 泰浩 (KISHIDA YASUHIRO)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号: 40270742

(3) 連携研究者

角道 正佳 (KAKUDO MASAYOSHI)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・教授

研究者番号: 30144538

岸田 文隆 (KISHIDA FUMITAKA)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号: 30251870

(H20→H21 研究分担者)

澤田 英夫 (SAWADA HIDEO)

東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号: 60282779

(3) 連携研究者

橋本 勝 (HASHIMOTO MASARU)

大阪外国語大学・名誉教授

大崎 紀子 (OHSAKI NORIKO)

京都大学・文学研究科・教務補佐員

研究者番号: 90419458

近藤 智子 (KONDO TOMOKO)